

# 委託事業実施内容報告書

## 平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

### 【日本語教室の設置運営】

受託団体名 インターカルト日本語学校

#### 1 事業の趣旨・目的

私たちの学校がある台東区は、人口の約 7%が外国人という地域で、言語、文化、宗教、生活習慣などの違いからくる様々な問題があるようだ。また、少ない国籍の外国人で、特に女性は、家庭にすることが多く、孤立しがちである。しかしながら、それら外国人に対する支援の十分な体制は作られていない。区で日本語教室は行われているようだが、時間・曜日が限られていることで子どもを学校に通わせている母親にはなかなか参加できないようである。また、開催も不定期とのことである。

この事業の目的として、「生活者としての外国人」の中で、特に母親のための居場所がつかれるようにすること。日本の文化や習慣だけを理解するのではなく、様々な国のことを理解し、尊重できるようにすること。地域や学校での母親同士のコミュニケーションが、円滑に行われるようにすること。子育ての不安や問題などを、日本語で自由に話せるような場をつくること。以上のことを勘案し、母親のための教室を企画した。

#### 2 運営委員会の開催について

##### 【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
5月11日	インターカルト日本語学校	西原鈴子、加藤早苗、大崎紀子、穂坂晴子、谷口真理	<ul style="list-style-type: none"><li>・昨年度の反省</li><li>・現状(東日本大震災後)における外国人の出入国について</li><li>・今年度の目標と計画</li><li>・今いちばん何がお母さん方に求められているのか</li><li>・参加者の募集方法について</li><li>・指導の形態(グループ or 個人指導など)</li><li>・新しい試みについて(校外学習など)</li><li>・新しい参加者をどのように増やしていくか</li></ul>	<p>震災以来、地域の外国人の多くは帰国している。この状況は、しばらく続くであろう。地震の影響より、原発の影響が強い。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・昨年度は、韓国のお母さんたちに偏っていたので、今年度は、募集の範囲を広くしていく。</li><li>・今年度は、校外学習に取り組んでみたい。お母さんたちの負担が少ないようにしたい。</li></ul>

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・本当に困っている外国人のお母さん方には、援助の手を差し伸べていないのではないか</li> <li>・参加者の国籍が偏っている点について</li> </ul>	<p>なかなか台東区から出られないみたいだ。</p>
--	--	--	--	----------------------------

【写真】



### 3 日本語教室の開催について

① 講座名

Hop Step Japanese ～ママ's cafe～

② 開催場所

インターカルト日本語学校

③ 学習目標

- ・「生活者としての外国人」の中で、特に母親のための居場所がつかれるようにすること。
- ・日本の文化や習慣だけを理解するのではなく、様々な国のことを理解し、尊重できるようにすること。
- ・地域や学校での母親同士のコミュニケーションが、円滑に行われるようにすること。
- ・子育ての不安や問題などを、日本語で自由に話せるような場をつくること。
- ・それぞれのニーズに合った日本語指導ができるようにすること。

④ 使用した教材・リソース

- ・「マンガで学ぶ日本語表現と日本文化—多辺田家が行く！」(創作集団にほんご 著、アルク 2009)

- ・「和の行事えほん(1)春と夏の巻」(高野紀子 著、あすなろ書房 2006)
- ・「和の行事えほん(1)秋と冬の巻」(高野紀子 著、あすなろ書房 2007)
- ・「せいかつの図鑑(小学館の子ども図鑑プレ NEO)」(流田直 著編、小学館 2010)
- ・国語教科書(小1～中3)
- ・浴衣
- ・サイコロ
- ・アニメ「サザエさん」「つるの恩返し」、ドラマ「ゲゲゲの女房」
- ・動画「日本のお通夜・お葬式」「お箸のマナー」
- ・七夕飾り
- ・かるた
- ・節分用豆・枱

⑤ 受講者の募集方法

チラシを作成し、幼稚園管轄の教育委員会に、面接に訪れる母親に配布依頼。  
前年度参加してくれた、韓国、中国の母親に、それぞれの友人関係に配布依頼。  
韓国料理、中国料理のお店にチラシを貼付依頼。

⑥ 受講者の総数 10 人

(出身・国籍別内訳 韓国7人、中国3人)

開催時間数(回数) 1.5 時間 (全 28 回)

3 時間 (全 1 回)

⑦ 日本語教室の具体的内容

回	開催日時	時間数	参加人数	国籍・母語(人)	教授者・補助者人数	内容
1	6月2日 10:00～11:30	1.5 時間	6人	韓国・韓国語(5人) 中国・中国語(1人)	教授者3人	自己紹介 サイコロ使用
2	6月9日	〃	7人	韓国・韓国語(6人) 中国・中国語(1人)		日本のアニメとドラマの学習 DVD 使用
3	6月16日	〃	5人	韓国・韓国語(4人) 中国・中国語(1人)		浴衣着付けの学習 浴衣使用
4	6月23日	〃	〃	韓国・韓国語(4人) 中国・中国語(1人)		教科書を読む学習 小1～中3国語教科書使用
5	6月30日	〃	9人	韓国・韓国語(7人) 中国・中国語(2人)		七夕の学習 ミニ七夕使用

6	7月7日	〃	6人	韓国・韓国語(4人) 中国・中国語(2人)		日本の歌の学習 CD 使用
7	7月14日	〃	7人	韓国・韓国語(5人) 中国・中国語(2人)		かるたとりの学習 かるた使用
8	9月15日	〃	4人	韓国・韓国語(3人) 中国・中国語(1人)		夏休みの思い出を語る学習
9	9月22日	〃	5人	韓国・韓国語(4人) 中国・中国語(1人)		秋の行事の学習 絵本使用
10	9月29日	〃	〃	韓国・韓国語(4人) 中国・中国語(1人)		秋の行事の学習 絵本使用
11	10月6日	〃	3人	韓国・韓国語(2人) 中国・中国語(1人)		日本の昔話の学習 DVD 使用
12	10月13日	〃	4人	韓国・韓国語(4人)		呼び方、呼び名の学習 テキスト使用
13	10月20日	〃	〃	韓国・韓国語(4人)		温泉の学習 テキスト使用
14	10月27日	〃	〃	韓国・韓国語(4人)		チヂミとたこ焼き作り
15	11月10日	〃	〃	韓国・韓国語(4人)		紛らわしい呼称について テキスト使用
16	11月17日	〃	2人	韓国・韓国語(2人)		謝罪表現の学習 テキスト使用
17	11月24日	〃	4人	韓国・韓国語(4人)		年の祝いの学習 テキスト使用
18	12月1日	〃	2人	韓国・韓国語(2人)		クリスマスとお正月の学習 テキスト使用
19	12月8日	〃	3人	韓国・韓国語(3人)		身近な表現の学習 テキスト使用
20	12月15日	〃	4人	韓国・韓国語(4人)		韓国文化の学習
21	1月12日	〃	3人	韓国・韓国語(3人)		おせちの学習 テキスト使用
22	1月19日	〃	3人	韓国・韓国語(2人) 中国・中国語(1人)		「初」の表現の学習 テキスト使用
23	1月26日	〃	5人	韓国・韓国語(5人)		節分の学習 テキスト使用

24	2月2日	〃	4人	韓国・韓国語(4人)		国会議事堂見学
25	2月9日	〃	2人	韓国・韓国語(1人) 中国・中国語(1人)		忌み言葉の学習 テキスト使用
26	2月16日	〃	5人	韓国・韓国語(5人)		お通夜・お葬式の学習 動画使用
27	2月23日	〃	4人	韓国・韓国語(4人)		お箸のマナーの学習 動画使用
28	3月1日	〃	2人	韓国・韓国語(2人)		「別れ」の表現の学習 テキスト使用
29	3月15日	〃	4人	韓国・韓国語(4人)		これまでの感想

⑨ 特徴的な授業風景(2～3回分)



**4 事業に対する評価について**

① 当初の学習目標の達成状況

- ・「居場所」作りということに関しては、達成できたようである。今回の活動をきっかけに、引き続きの活動を望む声が多かった。
- ・参加者の国が限られていたために、様々な国の文化を知るところまではいかなかったが、日本の文化を知った上で自分の国の文化と必ず比較するような姿勢がよく見受けられた。
- ・これまで父親任せだった学校行事へも、積極的に参加するようになった学習者が増えた。
- ・困ったことが起きると積極的に話題にし、またそれをあらためて1つのテーマとして取り上げて全員への理解へと結びつけることができた。

② 学習者の習得状況

- ・音読の練習をした際に、読み間違えたり、読み方に迷ったりしていると、自然と他の参加

者から助け舟が入り、人前で声に出して読んでみることで相乗効果があった。

- ・学習者からの質問で、例えば「最近の天気予報で『じりじり暑い』という言葉があるがどういう意味か？」と聞かれた。これまではそういった質問もなかったが、何気なくテレビを見ているのではなく、問題意識を持ちながら日々の生活の中からわからない言葉を見つけるようになった。

### ③ 日本語教室設置運営の効果, 成果

- ・文化が違うために最初はこうしたらよいかわからない、また自らも日本人の母親との接し方について困っている、など特に「困っている」ことに対する共感、またそのことを「一緒に考える」という機会を与えることができた。
- ・教科書を学年ごとに見せたことで、子どもたちがどのように日本語を学んでいくのかという課程をみせることができた。
- ・参加者からはよく「こういう場面、こういう意味で使われる日本語は何か」という質問を受けるのだが、説明が非常に難しい言葉もあり毎回頭を悩ませている。しかし、普段の生活の中では知る由もない言葉も数多くあり、それらを教えると参加者はとても喜んでくれる。そういった様子を見ていると、このような場を設けて活動していることがとても意味のあることだと実感する。
- ・身近なテーマ(例えばたくさんある「汚れている」の表現の違いを学ぶ)は、生活に密着した表現などを学ぶので、一般的な日本語教室ではあまり詳しくは学習しないと思うのでお母さん対象の講座ならではこそ扱えるテーマである。また、これまでは指導者側がすべてテーマを提示してきたが、学習者から「お葬式についてやってほしい」という要望が初めてあった。自分たちが本当に困った経験があるので、質問も活発に出た。
- ・久しぶりの参加者がいたが、母親たちの「居場所づくり」ということを考えた場合、多少ブランクが空いていてもいつでも参加できる雰囲気作りが出来上がってきたのではないかと思う。

### ④ 地域の関係者との連携による効果, 成果 等

- ・直接、地域の関係者と連携することはできなかった。ただし、地域の日本語教室にはチラシをお願いするなど、協力していただくことはできた。

### ⑤ 改善点, 今後の課題について

#### a. 現状

- ・台東区は13人に1人が外国人で、また働いている外国人が多い地域である。現状では、仕事を持っていないお母さんのみが参加できる教室となっている。例えばいわゆる「主夫」のような立場の男性、子育てのほとんどを担っている祖父母にあたる方々などは参加の対象とはなっていない。
- ・広報の手段としては、当校の近隣に住む韓国のお母さんのネットワークを中心に募

集をかけた。また、幼稚園・保育園管轄の教育委員会にチラシの配布依頼をした。昨今、働き始める外国人のお母さんたちも増え、参加者が減る傾向にある。チラシの配布、掲示を当校近隣だけではなく、広く募集をかける必要性を感じている。

- ・途中からの新規参加者が何名かいたが、それまでの流れを重視するために、この活動にどんなことを望んでいるか、ニーズを把握するのが十分ではなかった。

- ・擬音語・擬態語が、大人になってから日本語を学習した者には習得が難しいということを感じた。また、日本語能力試験の上級レベルで会話は大きな問題がなくても、実際に文章を読んでみると小学校中学年程度の教科書でもすらすらと読むことは難しいことがわかった。特に、漢字は大きな障害となっていた。これらの点をあまりフォローできなかった。

- ・参加者全員がバランスよく話したり聞いたりできるよう、指導者側が気を付けなければならなかったことがあった。

b. 今後の課題

- ・参加者が続けて来たいと思える環境作り、また更に新たな参加者を増やせるようなネットワーク作り。特にお母さんたちにとっては、生活の悩み、子どもの悩みなど話せる環境作りが必要であるから、生徒と教師ではなく、お互い地域で生活する人間同士の関係を意識して取り組む必要がある。今後、中国人のお母さんのネットワーク、インドのお母さんのネットワークにもアプローチしていきたい。

- ・参加者の希望や本当に困っていることを汲み取れるようなコミュニケーション、地道な広報活動。

- ・「話す」「書く」「聞く」「動く」がバランスよく配分された内容のもの、そして参加者が楽しめる内容のものを考えていきたい。

- ・「教える」ことの一方通行にならないように、ある時は学習者、ある時は指導者という形を、あくまでもベースは日本語ということで、とっていく。

- ・学校や日本人のお母さん方とのコミュニケーションの中で「誰もが知っていること」と日本人が思っているような表現や習慣を、先入観を持たずに指導する。

- ・お母さんに限らず、子育てに関わっているすべての人々対象の教室の開催。

c. 今後の活動予定, 展望

- ・子どもの勉強の問題は親にとって避けて通れない問題であり、特に国語や作文といったものに不安を感じている参加者が多かった。こういった問題は通常の学習塾では対応しきれない場合もあり、何らかの形で子どもに対する学習支援を行う必要があるのではないかと感じた。

- ・子どもと一緒に参加する機会を設ける。(例えば子どもと一緒に浴衣を着てみる、など)

- ・日本の文化を紹介する校外学習を取り入れる。

・参加者の中には本活動以外にも自主的に日本語を学んでいる参加者もいるが、実際に日本人と接する機会は少ないようで、実際のコミュニケーションの中で日本語を使うことができる場を必要としている。その点においても、本活動の場を継続的に提供していきたい。

### ③その他参考資料